國文學

日本語・日本文学・日本文化

二〇〇九年　第五四巻一号

解釈と教材の研究

特集

再読 プロレタリア文学

巻頭インタビュー

雨宮処凛「なぜいまプロレタリア文学か」

プロレタリアの作家たち

小林多喜二　宮本百合子　中野重治　宮嶋資夫
平林たい子　徳永直　梅川文男　宮地嘉六　若杉鳥子

學燈社

國文學　解釈と教材の研究

平成二十一年一月十日発行（毎月一回十日発行）第五十四巻第一号（一月号）

國文學1

❖特集　再読プロレタリア文学

第五四巻一号　二〇〇九年一月号

定価一六〇〇円　本体一五二四円

空飛ぶ法王 ―一六一俳句―

夏石番矢著（ジム・ケイシャン英訳）俳人として早くから作品を発表し、世界的視野に立ち精力的に活動を展開する夏石番矢。既成の守旧俳壇とは一線を画し、独自の世界観を構築する。情感豊かに、奇想天外な着想とリアルな一面が交錯する俳句を集めた。「日英対訳」定価二五二〇円

四季のことば辞典

西谷裕子編　四季折々の季節感あふれる言葉を約九一〇語採録し、春夏秋冬・新年の季節ごとに分類。日常の暮らしの話題やしきたりなども交え解説。定価二五二〇円

源氏物語注釈書・享受史事典

伊井春樹編　平安末期から幕末までの注釈書五二五点の詳細な解題と享受の歴史を年月日順に克明に追う。編者四十年に及ぶ資料収集の集大成定価一八九〇〇円

仮名草子集成 第44巻

菊池真一他編　本集成は仮名草子のすべてを網羅的に収録し、厳密な校訂をもとに翻刻する。第44巻に収録した作品は「世諺問答」「是楽物語」他収録 定価一八三七五円

老いの愉楽 ―「老人文学」の魅力―

尾形明子・長谷川啓編　「老い」をテーマにしてさまざまな角度から描かれた作品と作家を読み解く。「老い」の文学を愉しむガイドブックとして最適。定価二七三〇円

（価格は税込）

東京堂出版　〒101-0051　東京都千代田区神田神保町1―17
電話 03-3233-3741　FAX 03-3233-3746
http://www.tokyodoshuppan.com

【JapanKnowledge JKセレクトシリーズ】
日本研究に必須の近代雑誌をWebで自在に操る

Web版 日本近代文学館

編集・刊行 日本近代文学館

太陽 明治28年～昭和3年
博文館発行・全531冊・17万5千頁　二五二万円

文芸倶楽部 明治篇 明治28年～明治45年
博文館発行・全284冊・10万8千頁　一八九万円

校友会雑誌 明治23年～昭和19年
第一高等学校校友会発行・全380冊・3万8千頁　八、九二五〇〇円

CD・DVD版で好評を博した3タイトルをWEBで提供。32万頁の膨大な本文画像に6万5千件の検索書誌データを付し3タイトルの串刺し検索を実現。

【検索例】プロレタリア（ヤ）→13件ヒット
執筆者：昇曙夢／平林初之輔／大槻憲二
岩崎純孝／片上伸／関根悦郎／橋爪克巳

※詳細は無料トライアル版でご覧下さい！

日本近代短歌史の構築 ―晶子・啄木・八一・茂吉・佐美雄―
太田登著　A5判上製・492頁・定価八、一九〇円

青春燃焼の歴史として顕れるプロレタリア文学運動
日本プロレタリア文学史論
飛鳥井雅道著　A5判上製・244頁・定価二六三五円

八木書店 出版部
【呈詳細内容見本】＊定価は本体＋税5%の総額表示です。
〒101-0052　東京都千代田区神田小川町3-8　K係迄
03-3291-2961〔FAX-6300〕http://www.books-yagi.co.jp

ISSN 0452-3016
雑誌 03787―1

4910037870193
01524

Printed in Japan

連載

心意伝承
―遊働世界に生きる―

本荘雅一

第十六回　玉姜鎮石考③　断層に立つ大王

モノの放浪

かつて『レッドバイオリン』という映画に感激したことがあった。

現代人から〝レッドバイオリン〟と呼ばれる希代の名器が、三百年の時を生き、五つの国を旅する。クレモナの名工によって生命を与えられ、ひとりの神童とともにウィーンへ行き、ロンドンの天才バイオリニストに霊感をもたらし、上海で文化大革命の嵐に翻弄され、モントリオールで競売にかけられる……。バイオリン自身の運命を縦糸に、そしてこのバイオリンに惹きつけられた人々がたどる数奇な人生を横糸にして織り成される、壮大な叙事詩である（ストーリーは末尾の注を参照。結末まで説明したので未見の方はご注意）。

感動したが、同時に、口惜しくもあった。これは、まっさきに日本人が作るべき映画ではなかったか。

霊威ある器物・呪物が主人公となり、人間のほうが飾りと言ってよいような伝説は、我が国の古典にはたいへん多く認められるからである。

なかでも、「草薙剣（天叢雲剣）」がまず思い浮かぶ。ヤマタノオロチのしっぽに内蔵されていて、スサノオにわたり、高天原に届けられ、やがて伊勢神宮に遷され、倭姫命からヤマトタケルにあたえられ、尾張のミヤズヒメのもとにとどまり、熱田神宮に祀られる（記紀）。

天照大神の形代である「宝鏡」も、天孫降臨の際にニニギノミコトに託されて天下りし、やがて崇神天皇の時代に草薙剣とともに、豊鋤入姫命が御杖代となって鎮座地選定の旅に出る。大和（奈良）から丹後（京都府北部）、紀伊（和歌山県）、吉備（岡山県）とわたり、途中大和の三輪山で倭姫命と交代する。そうして伊賀（三重県）、淡海（滋賀県）、美濃（岐阜県）、尾張（愛知県）と、合計一〇〇年近い時を経て、伊勢（三重県）に鎮まるのである（『倭姫命世記』）。

そのほかにも、琵琶の名器「玄象」（藤原玄上→醍醐天皇→羅城門の鬼→源博雅）。

龍笛「葉双」（朱雀門の鬼→源博雅→浄蔵法師）。

「草刈笛」（用明天皇→牛若）。

『未来記』（聖徳太子→四天王寺→楠正成）。

源氏の名刀「髭切」（満仲→頼光→為義→義朝→頼朝）。

名槍「日本号」（正親町天皇→足利義昭→織田信長→豊臣秀吉→福島正則→母里太兵衛→俠客大野仁平→男爵立川敬一郎、以後不明）。

思いつくだけでもこれだけの事例があるのに、なぜ今まで『レッドバイオリン』のような映画が日本ではできなかったのか不思議である。

ともあれ、限りある個人の人生をこえて、また次の人生へと何かを伝える媒体が、こうした器物たちであった。本来の使用価値としての、「切る」とか「奏でる」、「読む」「突く」といった役割の、さらに深いところで、その器物にかかわった人々の生命律をまた次の人々へと伝えてゆくのである。

トーテム（自分たちの祖先にあたるとして神聖視する動植物、自然現象象徴物）のようなものとも言えようが、源氏の「髭切」以外は直接血縁がありそうな神聖具とも限らない。「髭切」にしたところで、それ自体が「祖先」という感覚ではない。霊的な縁戚を感ずる呪物、その物とかかわることで自分の運命の濃度が上がるような感覚をもよおす、「生命指標」と見ておきたい。

「生命指標」とは、物体でも物質でも言葉や記号、デザイン、音、においでも何でもよいが、それに関与することによって、目に見えていなかった背後の生命世界と交流する感覚をもよおすような、モノである。

出雲梟帥の佩ける太刀

今回はそうした「生命指標」に注目する。人工の制作物はもちろんだがそれに限らず、何らかの形で人間がかかわりを持つ自然物も含めて、モノとの深い交渉感覚を考えてみたい。様々なモノたちとの全身的なまじわりを通じて、いかなる思いを伝え残す生活を、人々はしてきたか、ということである。人はいかに生き、死に、モノはどんなふうに、すりこまれたいのちの痕跡を運ぶの

か。

本章①では「出雲神宝」なるもののようを追究して、どうやらそれは必ずしも実体ある器物とばかりは考えられないこと。水に映る月影、またそうした光に包まれた石や川藻たちの輝きの饗宴自体が神霊の示現であり、神宝だった可能性に至った。

②ではそうしたイメージ世界をもたらす特別な場とみなされていた、氷上に注目したのだった。日本一低い中央分水界であり、日本海と瀬戸内海を山越えなしに川筋でつなぐ回廊を形成し、交通や流通の大動脈の役割をも果たしていたこと。したがって氷上は、平地の分水界という特異な磁場を成し、海と大地の産物が行き交い、人々の思惑が錯綜するような、萃点をなしていた。

こうした特殊境界領域自体もまた、聖俗一如の光を放つ、得難い宝であったということである。

今回の手がかりは、「出雲梟帥の佩ける太刀」の歌である。

崇神紀六十年条には、出雲の内紛で飯入根が兄の振根に斃され、古事記には出雲建がヤマトタケルに斃される話があった。

ともに斃される側が自分の刀をだまし取られ、倒した側が、相手に押し付けた木刀を見て、「や雲立つ出雲梟帥が佩ける太刀黒葛多巻きさ身無しにあはれ（やあい、鉄の刀を持ってねえでやんの。あわれなやっちゃ）」と嘲り歌うストーリーとなっている。

こうしたばかばかしさが記紀の随所に散見されるのは、編纂事業に携わる者のなかに、必ずしも大和中心史観に好意的ではない者がいたことを暗示していると思われる。

あくまで憶測だが、本来この民謡は、たとえば「黒葛多巻きさ身利しにあはれ」とかなんとか、鉄王国出雲の利剣をたたえる民謡だったかもしれない。むしろ、慢性的な鉄欠乏症児童だった大利が、長じて出雲との力関係を逆転させた際に、昔の意趣返しをしたようにも読めてしまうのである。

大和はいかにして強国になりえたか

素朴な疑問だが、大和朝廷が海人族の磯部氏を使って氷上をおさえ、瀬戸内海交易圏や日本海交易圏への食い込みを果たせたとしても、中央政府としての主導権を握るのは、ふつうに考えるとやはり困難ではなかったろうか。

四道将軍の記事のように武力を持って周辺地域を制圧

しようにも、従来の常識で考えると、肝心の鉄が手に入りにくくはないか。

通説では、古墳時代中期の五世紀までは鉄の国産化はならず、弥生時代中期以降の鉄器文化はすべて大陸からの輸入に頼っていたという（『週刊朝日百科日本の歴史原始・古代⑦稲と金属器』）。

だとすると日本海ルートの鉄交易は出雲におさえられ、瀬戸内海ルートは筑紫（九州北部）に関門海峡を封鎖されれば終わりである。中国大陸江南地方からの黒潮ルートを当てにしても、九州南部や四国勢力がある。畿内大和に拠点を置く部族が強大な武力をもつ契機はあり得なくなる。

にもかかわらず、卑弥呼の墓とも目される大和の箸墓古墳は、考古学の成果を信用するなら三世紀中葉のものであるというから、少なくともそのころには、大和が強大な文化文明、勢力を持っていたことにもなるのだ。

この矛盾を机上で解くならば、実は鉄器の国産化はもっと早い段階で進んでいたか、もしくは西側勢力が大和との交易を拒否できない別の資源を豊富に確保していたか、どちらかもしくは両方あったということである。

結果的に大和勢力が日本の中央政権を担いえたのだから、さまざまな可能性があったのだろう。

国産製鉄はどこまでさかのぼれるか

五世紀以前の鉄の国産化の可能性は、例えば歴史作家の関裕二が指摘しているが、兵庫県豊岡市の、四世紀後半の入佐山三号墳に「砂鉄」が副葬されていることに見出される。肝心のタタラ製鉄炉は発見されていないものの、その祖型に当たる製鉄法は始まっていた可能性があることを意味する（『地形』と『戦略』で読み解く邪馬台国⑦」『歴史街道』二〇〇六年五月号）。

つまり、西日本が輸入に頼っていた相手の大陸ですら、鉄鉱石を原料とした鉄製品だったにもかかわらず、すでに日本国内で、砂鉄を原料とした高等な製鉄法が始まっていたかもしれないという、愉快な可能性なのである。

それが事実なら、実に日本が世界に先駆けて産業革命を起こしていたことになるからだ。

もちろん、豊岡の製鉄技術者は、その地に多く祀られているアメノヒボコに象徴されるように、新羅（少なくとも朝鮮半島）の職工であろう。火山列島である日本には砂鉄がいたるところ、豊富にあることに彼らは目を付け、何とかしてそれを精錬する方法を考えていただろう

とは、少なくとも考えられる。

豊岡からは、東側へ峠ひとつ越えれば簡単に「氷上回廊」にアクセスできる。氷上を管掌していた磯部氏を介して技術を導入すれば、大和王国は鉄の自給と大量生産を可能にできるわけである。

関は加えて、奈良県田原本町の唐古池（唐古・鍵遺跡）西側の弥生後期の溝から、小さな弁当箱のような形の褐鉄鉱の中にヒスイの勾玉が入った「鳴石」を、事例としてあげている（前掲論文）。これは縄文（ヒスイ製品）と弥生（鉄鉱石）との共存であり、そうした古い時代から褐鉄鉱を原料とした製鉄が存在した可能性すら示す。

『古代の製鉄』（一九七五年　学生社）の著者山本博は、イギリスの鉱山技師ウィリアム・ゴーランドの〝Metal in Antiquity〟をひいて、可鍛鉄（たたくなどの外圧で変形させられる鉄）は、鉄鉱石を完全に溶解させなくても、七〇〇～八〇〇℃程度の低温の熱で得られると指摘した（二一頁）。砂鉄の場合でも同じようである。

そうすると、たとえば縄文土器の場合は特別な施設をもたず、露天のたき火に薪を敷き、その上で焼成するが、その時の温度は八五〇℃にもなるという（『週刊朝日百科日本の歴史　原始・古代③』）。

つまり論理的には、縄文人も土器づくりの過程で、またまたき火の下敷きになっていた鉄鉱石や砂鉄、まれには隕鉄（鉄やニッケルを主成分とした隕石）から、可鍛鉄段階まで還元（二種類以上混ざり合っているかたまりの成分を切り離して、純粋な一種類のかたまりに近い状態にしてゆくこと）された鉄を発見する可能性はあったことになる。

とくに彼らは、丈夫で長持ちする土器を作るため、粘土に、鉄分の含まれた砂や、石英粒・金雲母などを含んだ花崗岩の腐食土を混ぜて念入りに練り上げるなど、鉱物の効用にもそうとう敏感である。こうした生活を一万年続けていても、縄文人はまったく鉄と出会わなかったとか、出会っても手に余るはずだと断定するのは、かえって乱暴ではなかろうか。

現に長崎県島原市有明町の小原下遺跡（縄文後期・紀元前二〇〇〇年頃～一〇〇〇年頃）で、晩期（紀元前一〇〇〇年頃～三〇〇年頃）の地層から、鉄滓をともなう「炉状」遺構が出土している（『長崎県文化財調査報告書第六七集小原下遺跡』一九八四年　長崎県教育委員会）。鉄滓とは鉄屎とも呼ばれるもので、砂鉄や鉄鉱石などの原料を燃焼して鉄に還元する時に生じる、どろどろした不純物のかたまり（製錬滓）や、鉄床の上で「熱いうちに」打ち鍛えられた鉄からはがれ落ちる破片（鍛冶滓）のこ

とである。だから製錬滓があるのは、製鉄が行なわれた証拠である。ということから、小原下遺跡は縄文製鉄遺構ではないかと考古学会に問題提起するも、黙殺されているらしい。

弥生時代の始まる紀元前三世紀までは基本的に石器時代生活を続けていた極東の島国で、たとえ小規模ではあっても、ヒッタイトが鉄器時代に突入した紀元前一五〇〇年に肩を並べるようにして、縄文人による原初製鉄が始まっていたと仮定することすら、世界史の常識に違反する「不敬な」ことなのだろうか。

祭りとしての原初製鉄の可能性

蛇足だが、先述の褐鉄鉱は鉄分を含んだ風化生成物として、土や水に溶け込んでいたりもするので、湿地帯などの草の根やそれを覆う粘土などにこびりついて結晶する。やがて根は腐り粘土も乾燥してなくなると、その分が空洞となり、なかに植物その他の化石が残って、振れば鈴のように音が鳴ったりもする。こうした褐鉄鉱結晶を「鳴石」とか「鐸」とか「高師小僧」とか「スズ」とか呼んだりするが、これが「鈴」の語源かもしれない。

連想ゲームを進めよう。古事記の「葦原色許男」根の国訪問段で、スサノオの娘スセリヒメを手に入れるために試練を受ける場面で、大規模な野ダタラを思わせるような話がある。

スサノオが鳴り鏑を大野のなかに射入れて、葦原色許男に採りに行かせる。そしてその野を焼く。火にまかれた色許男のもとにネズミがきて「内はホラホラ、外はスブスブ」といい、地下の空洞に隠れて難を逃れたとある。

ここで言う鏑が褐鉄鉱の「サナギ」のことで、それを炉のない野ダタラで焼成し、可鍛鉄になったかどうかを判断する感覚用語として「内はホラホラ、外はスブスブ」と言ったかもしれない。

ヤマトタケルが相模野の大沼神退治に赴いたときに野焼き攻めにあったのも同様で、沼の水草から取れる「サナギ」を焼成した可鍛鉄で作った霊妙な剣を、「奇鐸」の剣と呼んだのではなかろうか。

野ダタラ焼きだと地面に窪地を作る程度の素朴な「製鉄炉」しかなく、そうした程度の低い技術で作られた鉄製品では炭素などの不純物が多いので堅く脆く、後世までは残りにくい。古墳時代の王家の副葬品の鉄剣ですら、金属学の泰斗・桶谷繁雄によれば、地鉄のなかの炭素のばらつきも滓の分布も不規則で、よく鍛錬されたも

のではなく、「単に鋼を叩いて延ばして刀の形にした、いわゆる丸鍛えと言われる幼稚なものである」そうだ（『金属と日本人の歴史』二〇〇六年　講談社学術文庫　七七頁）。原初製鉄が認められたとしても、その品質は推して知るべきか。

しかし、以下のように空想してみたい。

製鉄には大量の燃料が必要で手間暇がかかり、そのくせ量産しにくい。石器より鋭利で美しいが長持ちしない。そのような、割に合わないものでも、だからこそ生活の効率とは別次元の霊威を感じ取ったり、自分たちの生命の律動（バイブレーション）を仮託したりしたのではなかったか。石器中心で生活していたころでも年に一度、あるいは数年に一度、皆でそうしたモノを作ることが、大いなる祭であったかもしれない。モノが出来上がることが、神の示現であったのではなかろうか。

資源の宝庫・中央構造線

話を元に戻す。

三世紀半ば以降の大和朝廷は、西日本諸国の海上封鎖にあっても、鉄を自給できるシステムを構築していた可能性が高いのである。

加えて、鉄以外の資源も次々に発見、利用し始めていたと考えられる。

二上山のサヌカイトは国内有数の生産量で、当然それは石器時代から活用されている。しかし大和の大王家は新しい権威を獲得するための資源を求めていただろう。そして、そうしたものを発見できたのではなかったか。

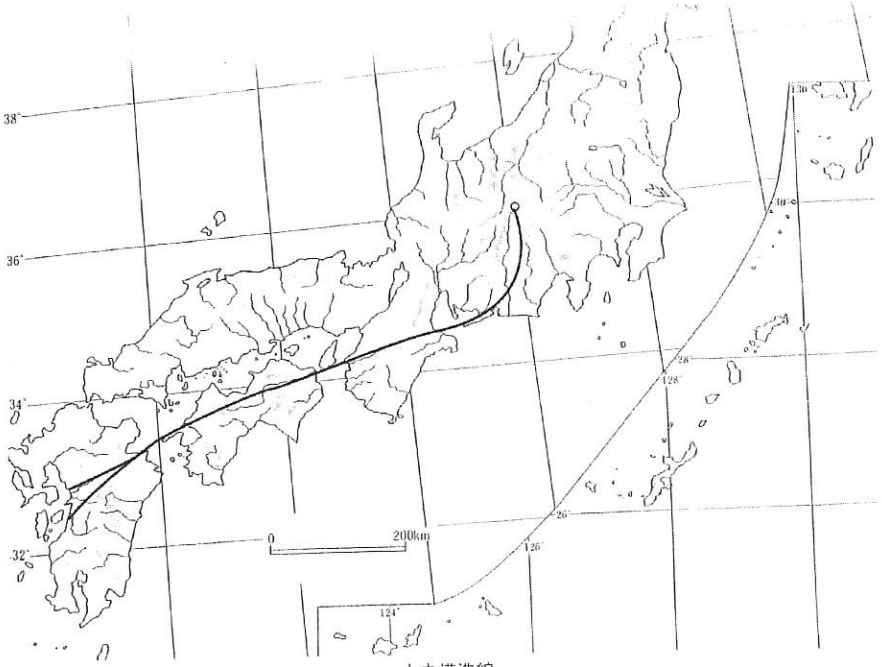
今や大流行と言ってよい観点であるが、「中央構造線（メディアラインン）近辺に分布する諸鉱山」の発見が、それを証拠立てる。

この件に関して、歴史地理学の分野で端を発したのは松田壽男（まつだひさお）の『丹生の研究』（一九七〇年　早稲田大学出版）である。また鉱山技師、本城清一（ほんじょうせいいち）の「空海の密教山相ライン」仮説（『真言密教と古代金属文化』所収　一九九一年　東方出版）によって、科学と宗教との未分化な鉱脈に光が当てられた。

現在の鉱山学では、著名な銅山や水銀鉱床が中央構造線近辺に分布していることは常識である。

中央構造線とは、一口でいえば長大な断層線のことだ。断層とは、岩石や地層が、地殻変動などの力で断ち切られた地割れ帯である。ケーキにナイフを入れて切ったようなもので、盛り上がっている側を外帯、陥没している側を内帯と呼ぶ。

中央構造線の場合はその範囲が広範で、長野県の諏訪



中央構造線

湖付近から天竜川東側に沿って南下し、愛知県の豊川の谷に入って紀伊半島、四国を通過し、九州では学説が二つに分かれるが、熊本、もしくはその南の八代に至っているという。

まさに日本列島の中央を分断（カット）する大断層である。

そうしたところになぜ鉱山が集中するのかというと、本城の説明によれば、「大きな地殻変動に関係して噴出したと考えられる塩基性火成岩に伴われた上昇鉱化溶液による交代作用にも関係し、鉱床生成後にこれを挟む他の片岩類と同様に、かなり激しい動力変質作用の影響を蒙ったものである。」（『真言密教と古代金属文化』）

耳から脳漿（のうしょう）が流れ出そうな話である。とりあえず断層が起きた時の地下の高熱や圧力で岩石が変質し、不純物の多かった銅鉱石などの純度が高まった、と理解しておこう。そう考えると、本城が勤務していた愛媛県出石（いずし）山（やま）の銅山山頂にある出石寺に伝わるという伝説も、合理的に理解しやすかろう。すなわち、

「養老二年八月大地鳴動数日に及びしが、其の後銅鉱変じて純銅となる、時人これを千手観音の出現となし崇拝厚かりしという」（昭和十年日本鉱山総覧所載より抜粋）。

「鉱業部民」の存在と活躍

このように弘法大師空海が開いたとされる霊場に鉱床が出現したわけだが、まるで空海は最初から予見していたかのように、中央構造線沿いの鉱山鉱床近くに、後世「四国八十八カ所」と呼ばれる霊場を次々と開いているというのである。

空海と、おそらくは彼に協力したであろう山の民（鉱業部民）たちとで地質地相を観察した結果、鉱山鉱床の存在を予測できる地点を、信仰的・経済的拠点として霊場を開いて行った、それを本城は「空海の密教山相ライン」と呼ぶのである（前掲書）。

紀伊半島にも視線を伸ばしてみれば、真言密教総本山の高野山もまた、中央構造線の外帯（南側）に位置した水銀鉱山であるという。『弘法大師伝』や『空海僧都伝』で、修行の地を探す空海を高野（狩場）明神が導き、土地を提供したと語られる。高野明神の母神が丹生都比売で、丹生とは、水銀（Hg）の原鉱石硫化水銀（Hgs）すなわち辰砂の、産出地のことである（遺跡などは発見されていないが、高野山奥の院の土からは、通常の二五〇倍濃度の水銀が検出されたらしい）。

この本城の研究成果は、一九九〇年四月九日放送のNHKテレビ「歴史誕生」の「空海、山を駆ける　追跡謎の水銀ルート」に取り上げられた。

さてここで考えたいのは、本城が「鉱業部民」と呼ぶような、山の民の存在と活動である。

こんにち中央構造線とか、フォッサマグナ（糸魚川―静岡構造線を西縁とする中央大地溝帯）とか呼ばれる大断層や、中小規模の断層については、露頭している部分も少なからずあるわけだから、山を知り尽くす人々にあっては生活と密着した情報を得る意味でも、かなり科学的な知見をもちえたであろう。すなわちどのようなところにどんな動物・植物・鉱物があるとかないとかを、彼らなりの根拠を持って予見し、探知し得ていたはずである。

だとすれば、さかのぼって大和建国の時期においても、そうした山野に生きる民たち（山伏・鉱山師・猟師・サンカ・木地屋・鍛冶屋・鋳物師などの祖形に当たる人々）を抱きこめば、朝廷を信仰的・経済的に支えうるほどの資源を獲得できたのではなかったか。

紀伊半島の中央構造線は、東は伊勢神宮、西は紀ノ川河口日前・国懸神宮の間を結ぶようなラインとなっている。このことも決して偶然とは言えない伝承が、『古語拾遺』の天石窟の段にある（この書は空海に高野山が下

賜される弘仁七（八一六）年にやや先立つ大同二（八〇七）年に撰上されている）。

石凝姥神が、天香山の銅で日の像の鏡を鋳造するが、最初にできたものは少し不満で、次に鋳造したものが美麗であった。

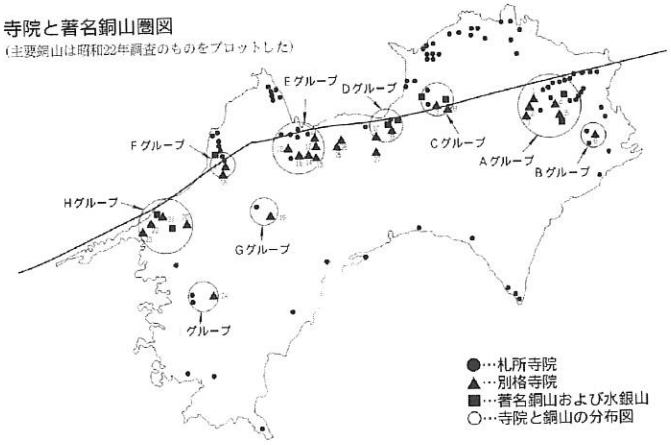
溶けた合金をたんに鋳型に流し込めば出来上がり、と素人が考えるほど単純なものではないらしい。桶谷繁雄によれば、水分をできるだけ避けること、合金内の水素ガスを抜くために、鋳型に流し込む前にしばらくさまし（鎮静させ）、気泡が出るのを防ぐこと、酸素を抜くための脱酸剤を入れること、など、気づかわねばならないことが多く、現代の技術でも完全な鋳物はなかなか作れないらしい（『金属と日本人の歴史』）。

鋳物づくりも、神意を諮る神事なのである。

こうしてできあがった二面の日神像の鏡は、最初のものが紀伊の日前神、次の美麗だったものが伊勢大神であると記されている。

しかるにこれらの銅鏡ははじめからセットにしてこの国土のいずれかに布置するものであった。そのいずれかというのが、中央構造線であった。つまり日神鏡制作の神話伝承者は、後世中央構造線と呼ばれる特異な地層と、その機能を認知したうえで、その両端に呪具を供え、祭祀対象にしたということになる。

紀伊半島中央構造線の東端宮川河口付近に伊勢神宮を祀り、西端紀ノ川河口付近に日前宮を祀る。この二点間は、松田によれば他の地域よりも圧倒的に水銀鉱山が集



「密教山相ライン」（『真言密教と古代金属文化』）
（本城清一作図に本荘加筆）

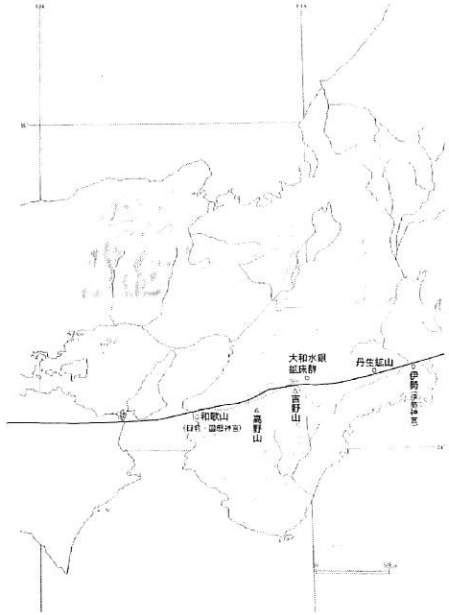
中しているという（『丹生の研究』一一頁）。しかもこのライン内には二大水銀鉱床群が含まれている。

伊勢神宮外宮から中央構造線にそって西へ約二〇キロ。三重県勢和村丹生に、丹生水銀鉱山がある。縄文時代から稼行している鉱床とも言われ、土器に顔料の朱を塗るための辰砂が採掘されていた。

また、吉野山から北東へ約二〇キロ。奈良県菟田野町大沢に大和水銀鉱床群がある。

壬申の乱において大海人皇子軍がこのすぐわき道を進撃してゆくのも意味があったのだろう。宇陀郡大宇陀町甘羅村にて二十余名の猟者をことごとく従軍させたと、天武紀元年六月甲申（二四日）条に特記されている。鉱山師たちとの連絡部隊を補充したということではなかろうか。

ちなみに松田は中央構造線と交叉するように東吉野・吉野・西吉野に存在する水銀鉱山群を〝吉野線〟と呼んでいる（前掲書一五頁）。こうしてみると、大海人皇子もまた、水銀ネットワークをことごとくおさえるために吉野に入ったかと思えるほどである。



中央構造線と水銀鉱床

科学的合理性と信仰は同源

大和建国以来、大王家はこの中央構造線上に展開する職能民たちを味方に、潤沢な経済基盤を築き、軍事力の面も充実させていったのであろう。

松田によると、本州で確認された三十もの水銀鉱山の、その三分の二以上は中央構造線に沿って分布すると言う（前掲書一一頁）。あわせて、「伊勢の丹生から西に、数々の丹生をつらねて豊後の丹生まで、地質学での中央構造線は、まさしく『丹生通り』を形成している」（同

一〇頁）とあるから、間違いなく、丹生一族など山に生きる人々は、経験的に中央構造線と鉱山分布との相関を正確におさえていたのである。

谷川健一はさらに、四国九州の中央構造線上に展開する豪族たちと、南朝天皇家との親密な関係をも指摘しているが（『日本の地名』一九九七年　岩波新書　一三八～一四〇頁）、ここでは割愛する。

ともかく、空海や『古語拾遺』の著者斎部広成といった天才的個人によるのではなく、自然の中で生きる人々が、近代科学にも劣らぬ生活科学を駆使して、大地の構造を把握してきた。

〝レッドバイオリン〟にくらべて巨大すぎるモノだが、大地に刻まれた地相が「生命指標」として人々を惹きつけ、覇者を立ててきた。大和政権代々の首長は、いわば断層に立つ大王なのである。

この事例についてここまで追ってきたついでに、技術者本城清一の次の言葉を虚心坦懐に聞いておきたい。

大宇宙の現象は総じて秩序を持ち合理的に運行していることに謙虚に自然の営みを畏敬する意識が生じれば、これが宗教だと言えないだろうか。

（『真言密教と古代金属文化』七頁）

神秘とも思える諸自然現象もすべて必然的な合理性と、因果関係があると認識し、その認識の延長線上に超越した宇宙の仏、大日如来を位置づける思考形成がなされたのではなかろうか。しかもその中には科学的唯物思考と大自然の摂理を神とする唯神意識が矛盾せず調和していると認識したのではなかろうか。私の思いを仮託する空海像はかくあったと納得したい。

（同二三頁）

狂信的な神秘主義に堕することなく、さりとて皮相な功利・効率主義に走るのでもない。深い次元に心身脱落した根源的合理主義を追究すること。一見欲望が渦巻く世界のように見える資源の争奪戦も、あらん限りの知恵と力を尽くして生きようとする人間たちにとって、それらのモノたちが相当の輝きをもって応えてくれるからこそ、そこに信仰も生まれるし、争いという、逆縁ではあるが熱い人間関係も生ずるのである。こうした温度を伝えるモノが宝である。

人々を争いへと駆りたてる程の強い欲望も、その対象となる「宝モノ」を見出す科学的追及の営みも、それぞれのカミを求める信仰心として同根であった。

ともに、生きる力の源である。

こうした心が時空をこえて共有される心意伝承が、たとえば鉱物資源やその製品はもちろん、産地の地形・地勢までも御神体として崇める生き方を支えているのである。

戦う「大王」から中心へと排除される「天皇」へ

大和王権が中央政府としてまがりなりにも諸国の頂点に君臨しうるためには、物質的な根拠とそれを権威づけるような心意伝承演出に成功していなければならないはずである。

そもそも、鉄の自給にせよ中央構造線上の鉱物資源の獲得にせよ、かなり広範なネットワークと自由な活動をできる者たちの協力がなければかなわぬことだ。それは当然、大王家の一族だけですべて担当できるわけではない。

むしろさまざまな個性、職能を持った人々を、それぞれの職能において光を与え、誇りを持たせ、祝福してやることで、大王家は祝福する主体としての権威を、彼らから認められるようになっていったのだろう。

大和の大王家は、天武の頃に「優勝争いをする豪族」であることをやめた。むしろそのような土俵から遊離した、優勝カップを授与する立場を発明し、自らを聖なる中心に排除することに成功した、と思える。

商品になるような資源の発見や開発にいそしむ人々を奨励し、自らはあえて専売権を持たずに自由貿易を認め、各部族から財を寄進・貢納、お供えされる神となった。

戦う大王は大海人皇子までで、壬申の乱以後は「天淳中原瀛眞人天皇」として、すなわち「沼や湖、湿原、海原といったあらゆる水域に唯一輝く人」であり、同時に「天皇」号を史上初めて使い出したと言われるように、空にきらめくすべての天体の絶対中心である「天皇星（北極星）」を、自らのアイデンティティーに措定したわけである。まさに中心への排除である。

思えばそれまでは各地域の強豪が勢力争いをし、優勝者がリーダーシップをとり、他と連合したり分裂したり、また優勝者が変わったり、といった抗争の繰り返しであった。が、そうした国体そのものの構造改革までしてしまったことになるのだろう。豪族どうしが血で血を洗う熱い戦争をするほうが例外的となり、有力者同士の合議によって天皇の詔勅が決まるという、新しい体制が出来上がっていった。

この天皇星すなわち北極星信仰体制を着想したのは、おそらく大海人皇子の独創ではあるまい。彼の乳母方である海人族の信仰なのであろう。つまり、磯部や海部がさまざまな意味で黒幕なのではないかと思われる。

ことが記紀成立のテーマそれ自体にまでかかってきてしまうと、もはや私の手には負えない。ただ、「出雲神宝事件」のくだりをダシにして考えようとしてきたのは、日本人が何かを宝たらしめようとする意識や、それを奉ずる感性のありようであった。

託宣や、氷上という場、象徴的な器物と、あてのない寄り道を続け、道草をつまみ食いしながら、ようやく案内人らしきものにたどり着いた。しかも、最初からかなりあやしいと思えた人々である。どこへ連れて行かれるか読み切れてはいないが、せっかくだからもう少し踏み込んでみよう。

注　『レッドバイオリン』（一九九八年カナダ。フランソワ・ジラール監督）あらすじ

一六八一年クレモナ（イタリア）。バイオリン職人ニコロ・ブソッティ（モデルはニコロ・アマーティであろう）は、生まれてくる子どものために、全身全霊をかけた最高のバイオリンを完成させようとしていた。そんなとき、高齢出産を案じていた妻アンナは、老家政婦チェスカのタロット占いで、五段階の予言を示される。

①「〝月〟。永く豊かで実りある生涯。永い旅に出る」…。

ところが出産の日、ニコロが対面したのは死産のわが子と、息絶えたアンナの死体であった。正気をなくしたニコロはその夜、霊感に導かれるまま作成したニスをバイオリンに塗って、彼の最後の作品を完成させる。

②「〝呪われた影〟。あなたの虜となるものには不幸がかかる」

ニコロ遺作の赤いバイオリンはオーストリアの山岳地帯にある修道院に寄付され、孤児の楽団の中で受け継がれていった。百年後の一七九二年、レッドバイオリンは心臓を患う十歳くらいの少年カスパー・ヴァイスにわたり、同時に彼の天才を急激に触発し始めた。

カスパーはウィーンの音楽家ジョルジュ・プッサン（メトロノーム発明者ウィンケル＋モーツァルトの父レオポルトか）に引き取られ、王家主催のオーディションを受けるべく、三週間の猛特訓を受けた。この天才児の超絶技巧はついに神の領域にまで達した（実際に十二歳の神童が演じていて圧巻）。ところが本番の時に、嫌味な皇太子の手でバイオリンがまさぐられ、さらに所望されたショックで、弾きはじめる瞬間にカスパーは心臓発

作で斃れてしまった。

カスパーとともに埋葬されたレッドバイオリンは何者かによって暴かれ、ジプシーの手にわたり、旅を続け、受け継がれてゆく。

③「〝男〟。ハンサムで聡明な男に誘惑され、堕落させられる」

一八九三年オックスフォード（イギリス）。作曲家にして演奏家フレデリック・ポープ（わざとらしいほどパガニーニ）は、自分の領地に現れたジプシー娘の弾くレッドバイオリンの音に魅せられ、取引を申しでる。この女体に霊感を受けたポープは恋人の女流作家ヴィクトリア・バード（紀行作家イザベラ・バードか）との官能のさなかにバイオリンを奏で、新曲を得るようになった。コンサートでポープの激情的演奏を浴びた貴婦人たちが身悶えし始めるシーンは、クラウス・キンスキー監督・主演の『パガニーニ』と同じ。適度に遊びも入っている。

ヴィクトリアが取材旅行でロシアに旅立ったあと、ポープは満たされぬ情念の泥濘にはまり身をもち崩す。旅行から帰ったヴィクトリアは、館から漏れるバイオリンの激しい音色に、ことのすべてを悟った。怒りにまかせてピストルを持ち出し、ポープとジプシー娘とバイオリンとの濡れ場に踏み込み、発砲した。

ポープの召使の中国人によって、レッドバイオリンは中国に渡り、古道具屋に売られる。よい値で引き取られたが、実はそれは楽器に嵌め込まれた宝石についた値で、首の部分に弾痕のついたバイオリン自体は店の奥に放置され、後年、子どもの練習用に安く買われていった。

④「〝裁判〟。権力のある役人の前で、あなたは有罪となる」

一九六五年上海。文化大革命の嵐のもと、音楽教師チョウ・ユアンは西洋音楽の信奉者として糾弾されようとしていた。自元共産党の女性幹部シャン・ペイの助言によって、彼は罪をまぬかれた。少女時代に買い与えられた赤いバイオリンを秘蔵していたペイは、息子のミンに一度だけそれを弾いて聞かせ、その後音楽教師のユアンに、バイオリンの保護を委託した。

⑤「〝旅の終わり〟。あなたは森の中の木のように強くなっている」

現代。変死したユアンの自宅から多数のバイオリンが発見され、押収された。文革は終息しており、彼のコレクションはカナダのモントリオールで競売にかけられることになった。一九九六年のことである。

ニューヨークからやってきた黒人鑑定士チャールズ・モリッツは、次々と楽器の鑑定をしてゆく中で、ガラクタ類と一緒に放置されている古びた赤いバイオリンから、強いインスピレーションを受けた。これこそ、「ブソッティ一六八一年の〝レッドバイオリン〟ではないか…」。彼の直感はそう告げていた。自身がその名器の伝説に感動し、あこがれ続けていたものだった。

モリッツの八方手を尽くした調査の結果、件の楽器は紛れもない〝レッドバイオリン〟オリジナルであることが判明した。「レッドバイオリン発見！」。衝撃のニュースは即座に全世界を駆け巡った。当初の目玉であったストラディバリウスはかすんでしまい、オークション当日には世界中の資産家が〝レッドバイオリン〟目当てに殺到した。その中には、オーストリアの孤児院の代理人や、ポープ財団の代表者、そして裕福なビジネスマンに成長した、シャン・ペイの息子ミンなどもいた。

功労者モリッツは定宿のホテルで呆然としていた。神器〝レッドバイオリン〟最大の秘密は、ブソッティ秘術のニスにある。成分分析の結果、ニスにはなんと人間の血液が入っていた！　レッドバイオリンとは、血塗女体であったのだ！　ブソッティは、死んだ妻アンナの血液を採取して、自作のニスに混ぜていたのである。おどろおどろしいほど純粋な、愛の結晶であった（同時に、老家政婦のタロットカード予言も、すべて的中していたわけであった。〝レッドバイオリン〟は、ニコロ・ブソッティの芸術魂と、最愛の妻アンナの霊との融合体であったのだから）。

神聖な楽器が、財力にものを言わせた俗物の手にわたる。モリッツ自身も独占欲のかたまりには違いないが、ついに我慢ならなくなった彼は、会場へ急行、あらかじめ入手していた〝レッドバイオリン〟の複製と、オリジナルとをすり替えるという暴挙に出る。

出品される寸前、間一髪ですり替えに成功したモリッツは、欲得渦巻くオークション会場を足早に去る。複製を二四〇万ドルで落札した高名なバイオリニスト、ルセルスキーの肥大した満足顔。父の帰りを無邪気に待つ娘に「よいみやげがあるよ」と電話するモリッツの惚け顔。すべての予言を聞き終わった三百年前のアンナ・ブソッティは、気が遠くなったような憂い顔。帰る彼女を見送る老家政婦チェスカ、申しわけなさげにタロットカードをたばねなおし、おずおずと手を引きさげる。